

## 4. 合同会議の協議結果

### (1) 地域産業の担い手育成の視点から見た専門教育の在り方について

#### 【検討の方向（案）】

- 地域の企業や商工会、関係機関等との連携を深めるとともに、行政施策との整合性を図りながら、インターンシップ等の体験的な学習や人的交流などの一層の充実を進める。（地元産業界等の人材や施設・設備等による学校支援の推進）
- 地元産業界等との意見交換会を積極的に実施し、産業界の求める人材や高校教育の実態等について理解を深める。
- 専門学科の役割や機能、豊富な教育資源などを積極的に広報し、専門学科で学ぶことによって将来の夢をかなえようという目的を持った生徒の募集に努める。

#### 【主な意見】

##### 農業部会

- ・全国第3位の農業生産県に相応しい人材を高校の中で育てるということについては3点～4点あると思う。
- ・第1点は、農業をやりながら地域を守り、維持発展させるという点が重要である。地域の中に、地域を守る人たちを育成していかなければいけない。
- ・2点目は、農業は広い領域の中から生産技術を学んでいかなければいけないということから、幅広い教育の内容と教育（学習）環境、それらに伴う施設整備等をお願いしたい。
- ・3点目は、地域の中の農業高校ということから考えると、地域との連携については、これからもっと大事になってくるのではないかと思う。

##### 工業部会

- ・工業高校への期待は、未来のものづくりを支える人材育成を担うことである。普通科高校では学べない確かな技能・技術・感性を磨き、時代の変化や技術の進歩に対応できる力と豊かな人間性を身に付けることと考える。
- ・従来ない発想で見直しをしていく、あるいは投資をしていくということが、将来の県民の幸福と生活基盤を確保すべく、長期的な視点で教育投資を優先すべきであると考えている。
- ・第9学区は、工業高校は無いが、連携できる工業系のコンビナート、電力やガス、造船などの企業、あるいは木更津高専やポリテクセンターなどの公的な施設がある。これらとの有効な連携を図れるような工業系のモデル高校を第9学区に作って、全国でもユニ

ークな工業系があるということを広報すれば、中学生や保護者などから目を向けていただいて、そこで進学・就職しようという機運が高まるのではないかと考えている。コンソーシアムや教育特区を設置するのも、アイデアだと思う。

### 水産部会

- ・水産関係は従来から県の施策の中に繰り入れていただき、数的にはそれほど多くはないが、後継者育成ということをやってきた経緯がある。水産業に就職する人を数多く出そうという官民あげた協議会がある。この協議会が、それぞれの学校の生徒に様々な体験をさせて、水産業への就職を進めていこうという取組をさせていただいているので、これまでの繋がりをより強くしていくのが、これからの方向性だと思っている。
- ・国も含めて、漁業の担い手確保ということが、今年から動き出した。水産を系統的に勉強して、水産の分野ではプロとしてやっていけるという教育を、水産系の学校で実施をして、生徒をどんどん現場の方で雇い入れていただくという取組を進めていかなければならない。
- ・水産物をもとにして、付加価値を高めた食品はいっぱいある。そういう産業の分野の教育も続けていくということが大きな柱として必要なのではないかと考える。
- ・水産高校で「資源をきちっと管理するんだ」という教育を受けた生徒を一人でも二人でも現場に送り出して、全体として活気のある水産業を作っていく必要があると思う。

### 福祉部会

- ・色々なところと連携をはかりながら進めなければ、福祉の分野においても、千葉県で暮らしている方々を支えることはできないだろうという所がある。
- ・福祉の方の進路を選択するといったときに、中学の先生方には福祉分野について理解を得られていない。例えば3K、5Kと言われるような職場で、福祉は選ばない方が良く、極端に言うともうそういう現状もある。
- ・高校の中で、福祉を体験することによって、すぐに就職に繋がるということも考えられる。また、長期的な視野になるが、大学・短大・専門学校などを経由して技術を磨いて、最終的にはまた千葉の地域に戻ってきて就職ができるということも含めて考えていく必要もあると思う。
- ・高校の中で、福祉の現場をなかなか理解していただけていない。しかし、人として、人間として、ともに生活をしていく、ともに歩いていくという視点も必要である。専門的な教育という部分と、人としての生きるための教育という部分の2面があると思っている。

## (2) 今後の専門教育の在り方について

### 【検討の視点（案）】

- (1) 他学科や他機関等との連携
- (2) 経営的な視点における専門教育
- (3) ICTを活用した専門教育

### 【主な意見】

#### 農業教育

- ・より密接な行政機関との連携が必要である。また地域との連携を継続しながら、他校・他学科をはじめ、小・中学校や農業大学校等の教育機関、地元農業法人等との連携についても、より一層推進していく必要がある。
- ・学校自らが、地域において職業として自立、持続できる農業の視点を持ち、農場等でこれを実践、実証し、生徒に体験させることが特に効果的であり、さらに、地域振興にもつながる取組として、より必要とされる学校づくりの面からも必要である。
- ・ICTを活用した専門教育については、農業者にとってもパソコンに関する知識は大きな武器であり、情報教育はぜひとも必要である。経営的な側面からも、パソコン・ICTの有効活用は必要であると考えている。

#### 工業教育

- ・先生そのものの魅力づくりが教育の一つの要素ではないか。
- ・就職の時、一番見られるのは人間力である。ただ勉強だけ出来れば良い、ただ資格だけ取っておけば良い、ということでは企業は採用しない。その中の大きな要素としては、部活動である。
- ・魅力ある学校というのは、そこで学んだことが良かったと思えるような学校づくりが重要である。そういう意味で、工業は一つの柱がきちっと立っており、ものづくりをやって、工業の知識を活かして、就職や大学などへ進む、ということを経験・保護者に理解していただくことが重要である。そのために、農業科や商業科の中のコースとしての工業コースの設置などにより、地域の方々が身近に感じる工業のイメージアップというのも実践的な処方箋としてあるのではないか。

#### 水産教育

- ・水産系の教員がかなり高齢化していることから、高齢化している教員を円滑に入れ替えていかないと、必要な教育も施せないような状況になってくのではないか。
- ・現場の水産のノウハウを、水産課を筆頭に地域の産業関係の方々との連携させていただくことによって、教員自身もまず学ぶ必要があるのではないかと考えている。いかに教員自身が関係方面とのパイプを太くしていくかということも、今後の重要な部分なのではないかと思っている。
- ・漁業は特別な産業形態だが、水産物については、それを加工していく段階で、まったく世間一般と一緒に土俵に乗ることになるので、生徒にもきちっとした技術力を教えていくことも必要である。

## 福祉教育

- ・高校生に対する福祉に関する興味や関心、意識の向上などを図る面でも、福祉系の学科やコースの設置校と、他の学科の設置校とのネットワークの構築が必要である。
- ・社会福祉施設や業種別の様々な協議会、また介護福祉士・社会福祉士養成の大学や短大・専門学校などとの連携により、職場体験や現場実習などの受け入れ先、または外部講師等の派遣などを通じながら、教育力を高めていくということも必要である。
- ・社会福祉協議会、自治会、町内会、PTA、など地域の様々な団体と連携を図るということを通じて、高校生が自ら地域への社会貢献をしていく、また、地域の福祉課題・地域課題などの共有及び解決する取組などもあって良いのではないか。
- ・現在ある福祉関係の既存施設・設備などを活用するために、介護教室などの福祉の教室などの開催や、福祉を目指す生徒への進学や就職などのガイダンス等も考えられる。

### 《福祉教育と看護教育》

- ・福祉も人々の生活を支援する仕事ということで、看護と重なる部分は非常に多いと感じている。これからは、生徒はもちろんだが、教員も何らかの形で連携をしていくことで、看護、福祉双方の学科の広がりを持つのではないと思う。両学科とも、人の生活を支え、人の命に寄り添う人材の育成をしている。若いうちから人の命に向き合う教育をするということは、本当に難しいが、とても素晴らしいことだと思っている。

## 観光教育

- ・現在の観光の概念は、従来と異なってフレームが見えにくくなりつつある。各委員から意見が出されたが、観光というのはその総和みたいなものである。文化生命進化より複雑で、進化というような思いもしないような切り口から見ると、文化進化というのは色々なものや情報、人との出会いの中で新しいものが生まれてくる。それが相乗効果を生んで、今のような人類の文化を創り上げてきたのではないかと考えている。観光は、人間の生活そのものといってよく、その教養教育が必要である。
- ・創造ということが何十年となく、日本の中では言われてきた。あらゆる分野を通じて、創造力のある人間を育てる、などと盛んに言われてきた。物まねということが、日本では毛嫌いされて、創造という言葉を使った時代があったが、物まねという基礎の部分がきちっと出来ない中で、創造というのはあり得ないだろうと思っている。観光についても、自分たちの地域の生活のことを理解して、その上で、色々な方、色々な情報、色々なものと出会って、発展的に地域創造が出来るのではないかと考えている。

## その他

- ・農業部会からの報告では「夢」という言葉があり、工業部会からの報告では「魅力」という言葉があった。夢を育てる部分が学校教育の中にあって、そしてその夢を職業観としてイメージアップしたときに、学校としての大いなる夢の支援という部分があるのではないか。
- ・出口論として、地域との連携ということがあがるが、連携というのは言葉ではなく仕組みづくりだと思う。地域の人たちを受け入れる仕組みを作れるかということだと思う。

### (3) 社会の変化に対応した専門教育の在り方（観光）について

#### 【検討の方向（案）】

- 各専門教育との関連の中で、地域や産業の理解、地域振興の在り方などの観光教育を通して、地域への愛着や理解、人との接し方、観光客のもてなしの気持ちなどの知識・技術・態度を養う。
- 各専門学科・コースの有する施設・設備や教育力等を、広く県内外の小・中学生や一般の方々に提供することにより、教育資源の有効活用を図るとともに、専門教育や地域の魅力の積極的な広報等を推進する。
- 千葉県の恵まれた観光資源（豊かな自然、歴史的遺産、国際空港、ゴルフ場、マリンスポーツ等）を有効活用した、新たな学科やコース、教科・科目等の設置について検討する。

#### 【主な意見】

##### 観光全般

- ・あらゆる産業分野の複合的な産業が観光ではないかと思っている。これを文化交流産業という呼び方をされている方々もいる。
- ・観光はある意味、何でも資源があれば観光になる。農業とか水産のグリーン、ブルーのツーリズムであるとか、工業部門・ものづくりの産業観光、また、福祉も観光の新しいツーリズムの一つとなっている。さらに、千葉県では亀田病院が医療観光の全国的なモデルになっている。
- ・どんなものでも観光として売り出せるということは、地域のそれぞれの資源と魅力をどうやって外へ発信をしていくのかということだと思っている。そういう中で、人づくりというのが大変重要になってくる。日常の生活の中できちんとコミュニケーションが取れる、すなわち、日常の挨拶ができて、お互いにきちんと意思疎通ができるということ。
- ・地域の児童・生徒がボランティアをやっているというところもある。これによって、小さいうちから自分の地域の文化や産業、地理などを学ぶことが出来る。その中で自分の地域に愛着や誇りが持てる。自分の言葉で話すようになるので、国語力や創造力、プレゼン力もついてくる。その中では、コミュニケーションがきちんとできる。
- ・学校を地域の文化センターのような位置づけにし、そこで地域文化を地域の人たちも含めて学ぶということができると、開かれた学校としての活用ということからも非常に望ましいと思う。
- ・「検討の方向」の最後の恵まれた観光資源の中に、マリンスポーツやゴルフと書かれている。今年は、国体を踏まえたスポーツ観光ということで、全県統一の秋のキャンペーンではスポーツを中心にして売らせていただいた。地元もスポーツが観光と結びつくようになってきた。

### 千葉商業高校（観光系の科目設置）

- ・本校では、観光をビジネスとして捉える能力と態度を育てることを目的として、平成16年に観光ビジネスコースを設置した。
- ・観光ビジネスコースで学んで、そのまますぐ就職ということはなかなか難しいことから、観光ビジネスコースを選択した生徒は、将来観光に関する職業に就くには、どうしても進学志向に持って行かなければいけない。
- ・科目としては大変面白い科目である。「観光基礎」を2年生で2単位、3年生で「観光実務」2単位。2年生の時に、外部の講師を招いて、興味深い、面白い講義を行っていただいている。
- ・これから、カリキュラム編成等がある。生徒が観光のことを学習しても大学に行けるようなカリキュラム構成、要するに商業に関する資格も取れて、観光に関する勉強も出来て、そして、大学に行けるようなカリキュラム構成をつくっていかねばと今模索しているところである。



〔合同会議〕



#### (4) 社会の変化に対応した専門教育の在り方（環境）について

##### 【検討の方向（案）】

- 各専門教育との関連の中で、身近な問題をテーマとした学習を通して、環境や環境問題に対する興味・関心を高め、必要な知識・技術・態度を養う。
- 地域の企業や産業界、関係機関等との連携により、地球温暖化対策の視点を中心に、専門教育を活かした体験的な学習を推進する。
- 本県独自の環境教育を推進するため、新たな学科やコース、教科・科目等の設置について検討する。

##### 【主な意見】

- ・「千葉県総合計画」において環境学習を推進するということがうたわれているが、具体的には、平成19年9月に策定した千葉県環境学習基本方針があり、これに基づいて環境学習を進めている。これは簡単に言うと、生涯にわたった学習活動、いわゆる生涯学習というものを基本にしている。
- ・その中では、やはり学校での学習の位置づけが非常に大きいと考えられている。学校というのは一つの効果的な環境学習の場であるという視点である。具体的な取組の例として、現在、環境生活部では、県内すべての小学校5年生を対象に、『夏休み環境学習帳』を配布し、地球温暖化防止のための具体的な行動を学習してもらう、ということをやっている。
- ・高校においても、一般教養という形で環境について学んでもらうということで、授業や学校行事全般等に渡って取り組むことが期待される。これは、学校改革という視点ではなく、平常時からそういったものは求められる。
- ・環境科学科などの環境に特化した専門教育については、環境学習を広く進めていく上での人づくりが期待される。人づくりというのは、環境学習の指導者、あるいは環境学習の機会や場をコーディネートするような人材の育成ということである。
- ・専門教育の、もう一つの視点としては、環境に特化したということではなく、農業や水産業、工業といったそれぞれの専門教育の中で、環境という視点をどれだけ盛り込んでいくかということである。例えば、農業で、肥料をたくさん撒きすぎて、それによって地下水が有害な物質で基準を超えてしまうということが問題になっているので、県の農林水産部では、肥料を適正な量で撒こうという、「環境に優しい農業」を進めている。このようなことは、おそらく高校の農業教育の中でもある程度取り入れられていると思うが、農業だけではなく、工業、水産業、それぞれの事業活動に伴って、環境への負荷というのがどれだけあって、それをどうコントロールしていくのか、いわゆる環境マネジメントという視点で、それぞれの専門教育において検討していただくというのは意味があることだと思う。

## (5) 社会の変化に対応した専門教育の在り方（商業）について

### 【検討の方向（案）】

- 経済社会のグローバル化や情報通信技術（ICT）の急速な進展等に対応した教育内容の充実を図る。
- 地域産業等との連携を図りながら、実践的な教育活動を展開するなどにより、専門性を深化させる教育を推進する。
- 他学科との連携を積極的に実施し、お互いの専門性を生かし合うことで、生産から加工、流通、販売までの総合的・実践的な学習を推進する。

### 【主な意見】

- ・今まで商業教育は、卒業後就職する生徒が多いことから、社会の構成員として活躍できる人材の育成を高校3年間で行う完成教育を行ってきた。しかし現在は、進学者の増加及び商業に関するスペシャリストの育成が求められていることから、完成教育から上級学校へと繋がる継続教育に変わりつつある。このような状況を踏まえ、今後、次のような展開を考えている。
- ・第一に、企業の持つ教育力の活用を産業界との連携により図りたい。急速な社会の変化の中、即戦力となる人材の確保を望んでいる傾向が見られる。学校と企業の連携を図り、企業が持つ教育力を活用し、生徒がスムーズに学生から社会人へと接続できる仕組み作りを図りたい。
- ・第二に、大学等の上級学校との連携を深めていきたい。高度な資格を活かした職業、例えば、公認会計士や税理士、情報関係などの職種に就く生徒へのサポート体制を、大学や専門学校と連携し構築したい。高校の3年間と大学の4年間の7年間の継続した指導の中で育成する仕組みを大学と連携を図り、将来のスペシャリストの育成を本格的に実施したい。
- ・第三に、地域との連携である。学校を取り巻く地域は、生徒にとって生きた教材である。マーケティングの知識、企画力、創造力及び起業家精神を育成し、さらに、異年齢の人との交流によるコミュニケーション能力の育成も図られている。今後は、その知識・経験をどのように将来の進路に結びつけていくか等々の課題を解決していきたい。
- ・第四に、他学科との連携についてである。現在、商業高校では、様々な商品開発を行い、その商品の製造を農業高校・水産高校に依頼している。起業家精神の育成の一環として、生徒の創造力や発想力、企画力を図っている。
- ・商業教育は生きた経済活動、ビジネス活動を教材に取り上げて、生徒の可能性を伸ばしていく教育を進めているが、今後も更に、商業教育を取り巻く様々な関係機関と連携を図っていきたい。社会で必要とされる人材の育成を目指し商業高校で学ぶ生徒の育成を第一に考え、生徒が商業教育を通し将来に夢を持てる教育を推進していきたい。